

「シエラお嬢様が倒れて、もう半年になるのね・・・」

「あっ、そういえば聞いた？お嬢様が倒れた時に召し上がられてたクッキーって、実は奥様から贈られたものだったらしいわよ？」

「そんな！まさか・・・毒？」

「それは分からないけど、でも最近お嬢様が前の奥様に似て益々お美しくなられたじゃない？奥様がお嬢様のことを凄く目で睨んでらしたのは何度も見たことがあるわ！」

「そんな！いくらお嬢様が前の奥様の忘れ形見だからって・・・！」

「本当あんまりよ！シエラお嬢様が可哀想・・・！使用人である私達にも親切にしてください心優しいお方なのに！」

掃除をしに来たのかおしゃべりをしに来たのか、侍女たちの賑やかな声は次第に大きくなっていく。

（ああ、こんなに大きな声で喋っている・・・）

私が心配し始めたちようどその時。

「・・・ボタンッ！！」

「こらっ！貴方！？廊下にまでおしゃべり声が聞こえてきたわよっ！？お嬢様の部屋で滅多なことを言っていないで、さっさと仕事に戻りなさい！！」

部屋に飛び込むように入ってきた侍女長からの叱責により、お喋りな侍女達は皆口を噤み、部屋の中は一気に静かになった。

侍女達は大きな部屋の中の、大きなベッドで、一人眠っている私のお世話を粛々としたあとは、部屋の掃除までもを一気に済ませて、静かに部屋を出ていった。

「・・・」

私は今、動くことは愚か、喋ることさえもできずにいる。先程侍女達が噂をしていたように、ひと月ほど前に継母から薬を盛られて、寝たままになってしまったのだ。以前より嫌われているとは思っていたのだが、まさか薬まで盛られるとは思っていなかったのだ、完全に油断していた。

意識はあるのだが自分では目を開けることも、身体を動かすことも出来ないの、周りからは寝ているとしか思われていないようだ。いつ動けるようになるのか分からないこの状況は、まともな生活を取り戻したいという想いから、焦りが募るばかりだった。

何故なら私には、動けないという恐ろしさとはまた別の、とある大きな問題を抱えているからである。

・・・
・・・
・・・

「お姉ちゃんっ・・・お姉ちゃんっ・・・！」

はあはあと荒い息遣いで私の太腿に小さな硬いものを押し付けているのは、義弟のアイスだ。透けるほど白い肌にキラキラと陽の光に反射する艶やかな銀髪、人形のように愛らしいアーモンド型の大きな瞳。まるで絵本から飛び出してきたと言われても信じてしまうほどの、可愛い可愛い私の弟。家族は勿論のこと、使用人や領地の人達にまで可愛がられて目一杯愛されている。そんな弟が、夜な夜な私のベッドへと潜り込んできては、何故だかこのような行為に至っているのだ。

「・・・」

「お姉ちゃんっ・・・ぼ、僕、もうっ・・・あうっ」

こんな時でさえ声が可愛いなどと思ってしまうほどに愛らしい弟は、私の太腿に強く腰を押し付けながら、ビクリと身体を震わせた。湿っぽく熱い吐息が首元にかかって、とても擦ったい。

アイスは私にギュウツと抱き着いたまま、息を整えているようだった。そうして暫くすると、もぞもぞと起き上がった。

「・・・お姉ちゃん、大好き。また明日来るからね」

アイスは私の頬へチュツ、と音を立てて口付けすると、静かに部屋を出ていった。

『ど、ど、どうしよう・・・!?!?』

私は心の中で頭を抱えた。自身に降り掛かって来る問題が多すぎて、どうやって解決したら良いのか全く分からない。そもそも動くことが出来ないし、声も出せない。

『これ、もしかして・・・詰んでない!?!?』

私は心の中で叫びながら、頭の中でゴロゴロと転げまわった。しかし現実逃避をしている場合ではない。何故ならこの秘密の行為は、次第にエスカレートしてきているのだから。

初めはただ、眠っているように見える私の元へ来て、『お姉ちゃん』と呼びかけるだけだった。泣きじゃくりながら必死にすがり付く姿に、私は何も出来ない自分が齒痒くて、情けなくて、心の中で何度も呼びかけた。

『私は大丈夫よ！』『もう泣かないで！』

私の声が届くことは決して無かったけれど・・・。

アイスの様子に変化があったのは、アイスが私の手を優しく握ってきた時に、身体がピクリと反応したのがきっかけだった。意図した訳ではなく、本当にたまたま反射的に動いただけなのだが、そのほんの少しだけの反応に、アイスは歓喜してしまった。

私が生きているのだと、泣きながら喜んでくれた。しかしその事がきっかけで、アイスは次第に私の身体に触れるようになっていったのだった。それにしても・・・

『いやでもどうして！？なんで！？いつの間にかこうなったのかしら！？』

今やアイスの行為は目覚めぬ姉へのコミュニケーション、とは決して言えない行為にまで発展してしまっている。しかも毎晩部屋へ訪れる度に次第にエスカレートしているのだ。今夜はどこまでするつもりなのだろう。私は心の中で大きな溜息をついた。どうにかしてこの行為をやめさせられないだろうかと考えている内に時間はあっという間に過ぎていった。

・・・
・・・
・・・

答えの出ない考え事をしている内に、いつの間にか眠ってしまったらしい。目を覚ました時、瞼の裏は真っ暗だった。昼間に感じられる僅かな灯りさえないし、肌に触れる少し湿った空気が冷たいから、今は夜なのだろうと推測する。部屋にはカチコチという時を刻む音の他には何も存在しない。侍女達の賑やかなおしゃべり声も、鳥のさえずりも、風がふいて生まれる空気の流れも、何もない退屈な夜はあまり好きではない。それにここ最近の夜の時間は・・・と、考えていたそこへ・・・

ーリーカリヤリ、キィーリー・・・

静かに、こっそりと誰かが入ってくる気配がした。この瞬間は、一番緊張する。もし、もしも、義母が動けない私のところへやってきたらと思うと、想像しただけでもゾツとしてしまうのだ。心臓の音がドキドキと飛び出してしまいそうに大きくなる。冷や汗がジワリと滲んだが、しかしすぐにトトト・・・と小さな足音が聞こえたので、私は心底ホッ、とした。この足音はアイスだ。今夜も遊びに来てくれたらしい。と、そこまで考えてから思い出した。ここ最近、アイスがこの部屋にこっそりと通う理由を。

「お姉ちゃんこんばんは。僕だよ、アイスだよ！」

アイスは私のベッドへギシリと音を立てながら登ってくると、私の頬へとソツと口付けする。

「今日も会えて嬉しいよ。生きててくれてありがとう。お姉ちゃん・・・大好き♡」

いつもの可愛いらしい声色で温かい言葉をかけてくれるアイスに、私は胸を締め付けられる思いがする。

(実の姉でもない私のことをこんなにも慕ってくれるなんて・・・)

私の実母は若く美しい内に事故で亡くなったためか、父の心にはいつも母の存在があったようだった。今でも母を愛しているのだと屋敷の内外問わず公言していた。そしてその母そっくりに育った私を、政略結婚した義母は疎むようになっていったのだ。その上、義母が目に入れても痛くないほどに可愛いがっていた自慢の愛息子が、疎んでいた私の後について回るほどに懐いたのが余計に面白くなかったのだろう。

私から義母へ積極的に仲良くなろうと動くことは無かったから、もう少し話し合えば良かったのか、などと考えていたその時・・・

「お姉ちゃん・・・」

耳元で鈴が転がるような可愛いらしい声が聞こえた。

「お姉ちゃん、聞こえてる？起きてるかな？大丈夫？どこか痛いところはない？」

アイスは目を瞑ったままでもなんの反応も無い私に、何度も呼びかけてくれる。アイスに呼び

かけられるたび、私は心の中で何度も返事をした。

『聞こえてるよ。私は大丈夫だよ！アイス、ありがとう・・・！』

しかし心の中の声は届くことは無く、結局はアイスをしょんぼりとさせてしまうだけだった。

「っ・・・お姉ちゃん・・・お姉ちゃんの声が、聞きたいよ・・・グスッ」

鼻を吸える声が聞こえて、私はハッとなった。アイスが泣いている。それなのに、どうすることもできない自分が酷く情けなくて、胸が痛いほどに締め付けられる。

「っ！お姉ちゃん・・・泣いてるの？」

『・・・えっ？』

どうやら私は自分でも気付かぬ内に泣いていたらしい。アイスは私の流れ落ちる涙を、ハンカチでそっと拭ってくれた。

「お姉ちゃん・・・ごめんね、僕が泣いてたら、お姉ちゃんまで悲しくなっちゃうよね。僕はもう泣かないから、お姉ちゃんも泣かないで・・・？お姉ちゃんが泣いちゃったら、僕もっともっと悲しくなっちゃうんだから」

そう言って私にギュ、と抱き着いてくる。誰よりも愛おしくて可愛いらしい、私の大切な弟。しかしそうやって抱き締められていると、いつの間にかアイスの吐息が乱れていく。

「ハア・・・お姉ちゃん・・・お姉ちゃん・・・」

小さな声で囁くように呼びつつも、太腿辺りに硬いものが押し付けられている感覚がする。

『や、やっぱり今日もなのっ・・・！？』

耳元で次第に切なくなっていく切なげな吐息に、見てはいけないものを見てしまっているかのようで、私は目を瞑って（元々瞑っているけど！）意識を遠くへ飛ばそうとする。

『私は何も見てない！何も感じてない！』

意識せずに居ようと思うのに、でもそれはとても難しい事だった。何故なら、顔にふわふわと当たるアイスの柔らかな髪であったり、小さな手でキュ、と掴まれる夜着の裾であったり、が邪魔をしてくるからだ。どうやってアイスの存在を感じてしまうので、もうそれならばいっそ早く終わってほしいと願っていた私の耳に、とんでもない言葉が飛び込んできた。

「あのねお姉ちゃん・・・あの、今日は・・・お、お姉ちゃんのお胸、見てもいい？」

『おっ・・・！？っお胸！？』

アイスの言葉に、私は混乱に混乱を極めた。今、可愛い可愛い弟の口から、お姉ちゃんのお胸^ニって聞こえた気がするんだけど・・・えー？そんな言葉ある！？動けないはずの身体にジワリと冷や汗をかくほど焦った私の胸元に、アイスがぎゅううっ！と抱き着いてきた。昔から甘えなくなったときは、いつも強く抱き着いてきてたなあ・・・なんて、思い出に浸っている場合じゃなかった！

「お姉ちゃん、ねえ、良いよね？」

ほんの少し上擦って聞こえるアイスの声は、彼が今から本気でそれを実行しようとしている事を私に理解させる。私は動かせない頭を心の中でブンブン振りまくった。

『いいえ！？駄目よ！？そんなっ！そんな！家族であろうとも異性に対してみだりに身体を見せるなんて、許されることじゃ・・・きゃあああっ！？』

私が頭の中でアイスを窘めようとしている最中に、私の夜着のワンピースの胸元でキュッと結ばれていたリボンが、彼の小さな手によってシュル、と音を立てて解かれてしまった。すると肌触りの良い絹のワンピースは、あっという間に左右に分かれて身体の上から滑り落ちていった。

「わあっ・・・！」

『わ、わあああああ！！！！』

感嘆したような声に、私はカアアツと顔を赤くする。いや

赤くなったような気がする。とても信じたくはないのだが、アイスはかなり間近で私の身体を見つめているようで、熱くて湿った吐息やジリジリと焼けるほど熱い視線を膨らみの先

端に感じてしまう。更に悪いことに、急に夜着の無くなった身体は、いきなり晒された少し冷たい空気に・・・反応してしまった。

ーっプクッ・・・♡

「わわっ!?!お胸の先が、ピンツて、なった・・・!?!」

『ふええええっ!?!』

アイスの驚いたような呟きに、私は羞恥で頭の中が焼ききれるかと思った。頭の中で頭を抱えてのたうち回る。

『何!?!何を見てるの!?!止めて!?!アイス!?!お願いだからもう離れてえええっ!?!』

しかし、アイスが暫く胸の先をジッと眺めていたかと思えば、今度は太腿にじわりと熱いものを感じた。

『・・・え?』

これって・・・もしかして?

「はううっ・・・お、お姉ちゃんのお胸があんまりにも綺麗だったから、出ちゃった・・・」

恥ずかしそうに呟きながら、照れたように私の胸にポフッと顔を埋めるアイス。

『やだ!私の弟が・・・可愛い!可愛いすぎる!世界一可愛い!』

・・・んだけど!やっぱりこのあけっぴろげた胸元に顔を埋められた体勢がかなり恥ずかしい事には変わりはない!私が慌ただしく揺れ動く感情に翻弄されている内に、アイスは落ちて着きを取り戻したようで、いつものように私の夜着をきちんと整え直すと、頬に口付けを落としながらおやすみの挨拶をしてくる。

ーっちゅ・・・♡

「今日も会えて嬉しかった♡お姉ちゃんおやすみ。また明日、ね?」

ーーちゅ・・・♡

瞼へも口付けを落とされて、その小鳥が啄むような可愛いらしい唇の感覚に思わず口元が緩んだ。

『ああー・・・許しちゃいけないんだけど・・・でも　こんなにも可愛いんだもんなあ・・・!!』

可愛いすぎるアイスに、心の中の私はいつも流されてしまうのだ。
そうしていつの間にか、十年もの歳月が流れた・・・。

・・・
・・・
・・・

「お嬢様、今日は天気が良いのでカーテンを開けますね」

侍女達は長い間眠りについたままの私にも、変わらない態度のまま話しかけてくれる。しかしこの日は天気が良いすぎたのか、朝日が強く入り込んできて、とても眩しかった。

「んっ・・・！眩しい、わ・・・レースのカーテンを引いてくれないかしら？」

いつも頭の中で応えていた私の声が、何故かいつもとは違って聞こえる。聞き慣れないこの声は、一体誰のもの？

「ッ!?!?!?お、おじよ、お嬢様っ!?!?!?」

無意識の内に眩しい陽の光に目を細めながら、大きな声を出す侍女の方を向けば、彼女の大きく見開かれた瞳と目があった。

「お嬢様が！誰か！お嬢様がお目覚めになりましたああああ！」

部屋にいた侍女は大慌てで人を呼びに廊下を走っていった。侍女同様に、目覚めたことに驚いた私は暫の間、思い通りに動いている手指を見つめていた。十年ぶりの自由だった。

「私・・・本当に目覚めたの・・・?ツ起きたのね！」

それから、まさに怒涛の一日だった。思い出よりもかなり歳を重ねた父が転がらんばかりの勢いで部屋に飛び込んできたかと思えば、すぐに何人もの医者が集められ、健康状態を確認された。何せ十年も眠っていたのだ。しかし身体は幸いにも、健康そのものであった。父はそんな私を見て、声を上げて泣いた。

「ああ、シエラ・・・！すまない・・・！本当にすまなかった・・・！」

私が眠っていた間も意識はあったので、十年分の記憶はある。さらに部屋に来る侍女達は私の前ではとてもおしゃべりだったので、屋敷の中で起こった出来事は殆ど全て把握していたように思う。父は私が眠りについてから三年後、義母が犯人だということを突き止め、精神病を疑って実家へと返した。後継者であるアイスの母親だということ籍は残してあるらしいのだが、しかし当の本人は実家へと返された事が余程ショックだったのか、本当に精神を病んでしまったという話であった。

一方、最愛の弟であるアイスは義母が実家へ戻ってから首都にあるアカデミーに通いはじめたのだが、私の事が心配だという理由であつという間に飛び級で卒業して、家へと戻ってきていた。

時間の止まっていた私とは正反対に、天使のように愛くるしかったアイスは今や目を見張るほど立派に成長しているらしい。長年勤めてくれていた侍女達は、自慢の主だと誇らしそうだった。

そんな話を聞いていると頼もしく思うと同時に、秘密の関係が続いてしまっている事が益々心配になるのだった。

「領内の視察にいったアイスにも連絡したから、二、三日の内には戻ってくるはずだ」

父の言葉に私は、力なくニコリと笑い返すのがやっとだった。

・・・
・・・
・・・

夜は恐ろしい。真っ暗な視界だと、寝ているのか起きているのか、分からなくなってしまから。だから私はカーテンを開けたままにして、星々を眺めながらベッドで横になっていた。寝てしまったらまた目覚めることが出来ないのではないかと思うと、眠るのが怖いのだ。

何時間そうしていただろうか、ベッドの上で何度目か分からない寝返りをうった時、シンと静まった部屋に微かな足音が聞こえてきた。遠くの方から小走りで聞こえてくるその足音

に、私は心臓が跳ねる。

(こんな時間に・・・?)

使用人達も寝静まっている時間帯だ。私は身体を起こして耳を澄ます。足音は益々こちらへと近付いてきていた。

私を葬ろうとした義母はもう居ないはずだ。そう思うのに、冷や汗が止まらない。

(一体誰がこんな夜更けに?)

そうしてついに、その足音が私の部屋の前でピタリと止まった。

私は急いで毛布を被り、サイドテーブルにおいてあった本を手元に手繰り寄せた。本が一体なんの役に立つかは分からないが、それでも何も無いよりかは、いくぶんマシに思えたのだ。いざというときはこれを投げつけて、相手が怯んだ隙に逃げ出そう、そう思いながら本を強く握りしめてシーツの隙間からドアを見つめた。すると、ドアノブがゆっくりと回った。

ーカチャリ、キィー・・・

息を潜めるようにしてこっそりと入ってきたのは、体躯の良い大柄な男性だった。フードを目深に被り、ハッ・・・ハッ・・・と肩で息をしている。

「・・・姉様？」

何うような小さな声で呟かれたそれは、心臓が飛び出そうなほど心細かった私に極度の安心を与えてくれた。

「えっ!?!もしかして・・・アイスなの!?!」

シーツからガバツと飛び出すと、ちょうど雲の隙間から漏れた月の光がアイスを照らした。しかしそこに立っていたのは、私の知らない青年だった。長い外套で隠れているが、姿勢正しく佇むその逞しい身体は、絶対的な自信に溢れているかのようにだった。アイスだと思い込んでいた私は、慌てて身体を強張らせてシーツを被り直した。

「・・・ッ!?!だ、誰!?!」

しかし私が声をあげた途端、男はフードをあげた。煌めく銀髪は月夜に眩しく、凜々しい眉

に神秘的なまでに美しい瞳は、幼かった頃の面影が僅かに残っている。そして私と目があつた途端に、凜々しかった眉はへにやりと下がってしまった。

「~~~~ツツツ！姉様っ！」

「へっ！？えっ！えええ！？」

物凄い勢いで私の側へと駆け寄ってきた男は、私のベッドの傍らに膝をつくと、ベッドに手を付いて私を潤んだ瞳で見上げてくる。

「・・・貴方もしかして、アイス・・・なの？」

思い出よりも随分と、想像よりも何倍も大きく成長していたアイスに恐る恐る尋ねれば、アイスは眼に一杯の涙を浮かべながら腰に抱き着いてきた。

「っ！・・・そうです！俺です・・・アイスです！」

グスグスと鼻を鳴らしながら、ギューギューと抱きつかれると小さな頃の彼の姿と重なる。

「アイス・・・！アイスなのね！ツごめんね、ずっと・・・ずっと心配かけて、ごめんね！」

私がアイスの大きな身体に被さるようにして抱き着くが、今やもう手が回りきらない程だ。

「ふふっ・・・大っきくなったねえ・・・！」

大きく広がったアイスの背中中は鍛えているのかとても逞しい。成長を感じようと背筋に沿って手を添えれば、アイスはビクリと身体を強張らせた。

「ッ姉様・・・！？」

何故か頬を染めながら上目遣いで見つめられてしまい、私は慌てて手を離して、身体をひく。

「ごめん！嫌だった!？」

よく考えれば、確かにアイスはもう姉に抱きしめられるような子供ではない。アイスの表情は拗ねているようにも、怒っているようにも見えた。しかし私がしょんぼりと肩を落とすと、

今度はアイスの方から近寄ってきた。

「あの、姉様・・・今夜は一緒に寝ても良いですか？」

「えっ??？」

そういえば今は深夜だった。よく見れば余程急いで帰ってきたのだろう、髪に葉っぱまでついてる。私は葉っぱを摘みアイスの乱れた髪を整えながら、見た目と違って幼い頃と変わらぬ様子のアイスが嬉しくてクスクスと笑う。

「アイスったら・・・今夜は疲れたでしょうから、部屋でゆっくり休んで？明日また改めてゆっくり話しましょ？」

しかしアイスの意思是思ったより強固だった。

「嫌です！せっかく姉様が起きたのに、またお別れするなんて・・・堪えられません！」

私の腰にぎゅううっ！と抱き着きながら、アイスは首を振る。まるで小さな子どもに戻ってしまったかのような行動に私はこっそりと溜息をついた。アイスは子供の頃から一度こうだと決めたら、とても頑固なのだ。

「んー、もう・・・分かったわ。でも今日だけよ？」

「っ！ありがとうございます！じゃあ俺はすぐ身体を清めてきますので、先に寝ていてください！ではまた後で！」

アイスは言いたいことだけ言うと、風のように慌ただしく部屋を出ていった。

「ふふっ、アイスったら・・・」

あんなにも嬉しそうにされてしまったのは、断らなくて良かったとさえ思ってしまう。私はベツドへと横になりながら、一瞬目を瞑ったすきに、いつの間にか眠ってしまったのだった。

・・・

・・・・・・・・・・

「っ・・・、ふ・・・っは・・・？あ・・・ああ・・・」

ふと意識が浮上したとき、いやに身体が熱かった。汗をかくような季節ではないのに、身体はじんわりと汗ばんでいる。そしてどこかで、ギシギシというベッドの軋む音と、誰かの押し殺したようなうめき声まで聞こえてきた気がする。

「？」

「姉様・・・！」

熱い吐息と共に呟かれた自身を呼ぶ声に、私はギクリとした。この感覚には覚えがあったからだ。

「ああ・・・も、出るっ・・・！」

切羽詰まった嘔きと共にギュツ、と強く抱きしめられながら、太腿に熱く硬いものを押し当てられた。すぐにジワリと熱いものを感じて、私は慌てて目を強く瞑った。

(ア、アイスのバカーーーッ！何をしてるのっ！？私はもう、目覚めたのに！？)

このような行為も、今までは私を目覚めさせるためにやってくれていた筈だった。百歩譲って。だというのに、目覚めた私に、というか！そもそも寝ている女性を襲うだなんて・・・！

(これは姉としてビシツと言わなくちゃ・・・！)

私はパチリと眼を開けた。動けなかったときは注意が出来なかったけれど、今はきちんと彼を叱ることが出来るのだ。今こそアイスの間違った行動を正さなければ！

しかしそう思った時、アイスの手が夜着の上から私の身体を弄るように動き始めた。

「ッ！?!?!」

「姉様・・・ねえ、起きてくださいよ♡起きて俺の相手をしてください♡」

首筋に擦ったいくらいの口付けを落とされて、私はついまた眼をギュ、と瞑ってしまった。

この子、今、なんて言った!?

しかし私が理解するより先に、アイスの手は遠慮なく身体を弄り始めてしまった。先程太腿についた液体は今や冷たくなっていく。アイスはそのヌルりとぬめったそれを、私の下着へと擦り付ける。

「ふふ、いつも受け止めてくれてありがとうございます、姉様・・・♡」

何度もヌメリをすくい取っては秘裂に沿って擦り付けてくるので、その危うい刺激に思わずピクリと肩が跳ねた。

「・・・気持ち良いですか？姉様はここを優しくナデナデされるのが好きですもんね♡今夜は姉様が好きなここを、いっぱいナデナデして、もっと気持ちよくしてあげます♡」

まるで起きているのがバレているかのように話しかけられて、思わず「違う!」と返事をし、てしまいそうになるが、口を開けば変な声が出てしまいそうで、安易に口を開くことが出来ない。アイスのゴツゴツとした男性的な指は、やがてヌチュル、ヌチュルと湿った音が出始めるまで、執拗く下着の上を往復した。そしてそんな音が聞こえてくる頃には、もうすっかり身体は火照り、吐息も熱く荒くなってしまった。彼の指がある一点を通るとき、必ず身体がビクツと跳ねてしまう。アイスの指先が掠めるのを待ち遠しく感じてしまうような、でも少し恐ろしいような、複雑な気持ちだ。

「ああ、すつごい音だな・・・これ、俺のだけじゃないですからね？姉様のトロトロで濃厚な蜜とグチャグチャに混ざってこんな音になってるんですよ？♡ふふ、それってすごくやらしいですよね♡」

物凄く恥ずかしい事を耳元で愛を囁くように紡がれて、私はみるみる顔に血液が集まっていくのが分かった。耳を塞いでしまいたいほどだったが、いきなり耳穴に熱くヌメった舌がねじ込まれて、思わず口を大きく開いてしまった。

「~~~~ひあうっ?!?!?」

手のひらをピンと広げて耐えながら、声にならない悲鳴をあげて固まっていると、その伸ばした指を絡めとるようにして大きな手に握りこまれた。

「今夜も姉様のこと全部愛しても良いですか？俺、ずっとこの日を待ってたんです♡」